

「魅力ある学校」づくり構想の検討状況説明会（概要）

○日 時：平成 28 年（2016 年）11 月 5 日（土）19 時～21 時

○場 所：ローズ文化ホール

| 質問・意見等 | 豊中市からの回答 |
|---|--|
| <p>庄内西小学校に子どもを通わせている保護者だが、先日、教職員組合が開催した勉強会に参加した。その勉強会には池田市の施設一体型小中一貫校の教員も参加していて、小中一貫校の現状を教えてくれた。その教員によると、小中一貫校では、小中の教職員の連携は取れるが、小学校と中学校では授業時間が違うので、中学生が英語のリスニングを行っている最中に小学生は騒がないようにしなければいけないこと、昼休みに小学生が遊ぶのを優先して中学生がグラウンドで遊ばなくなったことなど、小学生と中学生がお互いに窮屈な状況になっていると聞いた。そのような現場の実態から、本当に小中一貫校にする必要があるのか疑問である。小中一貫教育の歴史は浅いし、全国でも 10%ほどしか導入されてない。実験的に今から庄内地域に小中一貫教育を導入する必要があるのか。</p> | <p>小中一貫教育は、平成 26 年度（2014 年度）において、全国で 211 自治体、1,130 件の取り組み実績があります。文部科学省の実態調査でも、学習意欲の向上や、児童生徒の規範意識が高まった等、大きな成果があると報告されています。先進事例をみますと、小学生と中学生が一緒に校舎で過ごすことにより、下級生は上級生を見て憧れの気持ちが強くなったり、上級生は下級生の見本となろうとする意識が高まったりするなどの効果も報告されています。本市におきましても、従前から各中学校校区の状況に応じて、小中連携の取り組みを推進してきました。今までの小中連携の取り組みの成果に加え、先進事例も参考にしながら、「魅力ある学校」づくりにつなげていきたいと考えています。子どもたちを取り巻くさまざまな課題を解消し、教育活動を充実させるために小中一貫教育は有効な手立てであると考えております。</p> |
| <p>プールに関して、年間の授業数が決まっていると思うが、小中で共有すると、プールの授業数が減るのではないか。すでに市内には屋上プールがあると聞いたが、万が一、大地震が起こったとき、満水状態のプールが屋上にあったら、水が漏れだすなど、安全面で問題があるのではないか。</p> | <p>プールの年間授業数は決まっておりません。現在でも、雨天等でプールの授業が計画より少なくなる場合もあります。1つのプールを小中学校で共有することは考えられますが、屋上プールに屋根を付けるなど、整備の工夫により、通常よりも長い期間プールを使用できることも考えられます。大地震への対応につきましては、安全面を充分に考慮して設計する必要があると考えています。一方、例えば、災害時にトイレの水として利用できる等の利点もあります。</p> |
| <p>小学校と中学校でそれぞれ違う教員免許が必要だと思うが、どうなるのか。</p> | <p>中学校は教科ごとの教員免許になりますので、取得している教科については、中学校の教員が小学校で授業することができます。小学校の教員免許しか持っていない教員は中学校で授業することはできません。小中一貫校においても、中学校の教員は取得している教科について、例えば、英語などの教科を小学校で授業する「乗り入れ授業」を行うことができます。施設一体型小中一貫校であれば、中学校の教員が小学校から子どもたちに関わることができ、また、小学校の教員は中学校へ進学しても引き続き関わるができるため、より多くの教員がしっかりと子どもたちを育むことが可能と考えています。</p> |

庄内西小学校に子どもを通わせている保護者だが、質問ではなく、意見を述べる。今回の提案について、保護者として不安に思っていること、二点をお伝えする。

まず一点目、小学校時代のいじめが中学校でも続かないか心配している。本日の資料に「中一ギャップを防ぎ、なだらかな接続ができる」と記載してあるが、小学校時代のいじめも接続されてしまうのではないか。10月末に庄内地域で教職員組合の勉強会が開催されたが、そこで国立教育政策研究所が発行している「中一ギャップの真実」という冊子もらった。その冊子には、いじめは中学校から認知件数が増えるので、まるで中一から急にいじめが増えるように誤解されやすいが、アンケート結果では小学校時代が最もいじめが多いとされると書いていた。小中一貫校になって、環境を変えるチャンスがないので、小学生時代のいじめが、ずっと続いてしまうのではないか。また、「中一ギャップ」という言葉自体、文部科学省の冊子には、「ギャップというほどの変化なのかについては、慎重であるべき」と記載されており、安易にこの言葉を使わないように指導している。本日の資料P10に「中一ギャップ」という言葉が記載されているが、国からの指導もあるので、市民に配布する資料に、この「中一ギャップ」という言葉を用いるのは不適切ではないか。

次に二点目、東京都品川区の小中一貫校の子どもたちがいじめを原因にして自殺している。品川区には小中一貫校があり、4年ほど前からいじめによる自殺が相次ぎ、合計5人の子どもが亡くなっている。品川区の例は、施設一体型小中一貫校である点、千人の学校規模である点、品川区が庶民的な地域である点について、庄内地域と似たような状況であると感じる。亡くなったのは、小六が1人、中一が2人、中二が2人でいずれも小学校1年生から同じ学校に通っていた子どもたちである。品川区では、2012年に最初の生徒が亡くなってから、心理学や教育学の専門家を派遣するなど、改善策をとってきたが、その後も相次いで4人が亡くなった。この庄内地域に小中一貫校が開校した場合も最初の数年は良いと思うが、創立5年、10年後に、品川区と同じように追い詰められる子どもたちが出てこないか非常に心配である。

庄内地域には子どもの数が少なく今すぐにでも小中一貫校に取り組んでほしいと願う学校もあるかもしれないが、私の校区に関して、校区内の未就園児の人数を見た

教育委員会でも「中一ギャップの真実」は承知しております。この冊子には、「ギャップという表現が安易に使われることで、小学校6年生から中学校1年生に至る過程に大きな壁やハードルが存在し、それが問題であるかのイメージを抱きがちだが、実はそうではない。」と警鐘を鳴らした上で、「小学校の段階で予兆などがあっても、それに対応できなかつたり、解決できなかつたりという積み残しや先送りが増えていること。また、一方、中学校で小学校の状況を十分に把握しないまま、あたかも中学校1年生をスタートラインにできるかのような昔のイメージを脱し切れていない学校が多いのではないか。中学校区単位で連携を進めていかなければ、中学校の課題が解消することはない。」といった内容が書かれています。教育委員会といたしましては、小中一貫教育によって、小学校と中学校の教職員が連携し、小学校のときからしっかりと子どもたちを見守り育てまいりたいと考えています。「中一ギャップ」という用語を安易に用いるべきではないということに関しまして、本日の資料にも「いわゆる中一ギャップ」と記載しており、表現を配慮しております。

次に、二点目、品川区の小中一貫校で、5人の子どもたちが亡くなったことについてですが、豊中市において、決してそのようなことが起こらないように、小学校の段階から子どもたちを9年間しっかりと育てまいりたいと考えております。

| | |
|---|--|
| <p>ところ、まだ子どもの数が急激に減るという事態には至っておらず、改革を急ぐ状況ではない。そして、地元の小学校がなくなることに対する声も多くある。まだ、計画を策定するまでに時間があると思うので、全国の小中一貫校の様子をみながら、庄内地域として一括りにせず、学校別に状況を見て、施設一体型小中一貫校が難しいと思われる地域には、施設併用型小中一貫校を取り入れるなど柔軟な検討を進めてほしい。</p> | |
| <p>不安な気持ちや質問を三点、伝える。</p> <p>一点目、保護者や地域から「拙速に進めないでほしい。」と意見があったとのことだが、不安などの声があっても、この構想案を進めていくのか。</p> <p>二点目、放課後子どもクラブのことだが、校区が広がって、通学距離が長くなるので、下校にも時間がかかり安全面で不安である。保護者の迎への負担が増えるのではないか。</p> <p>三点目は、こども園に関して、今、各中学校に1つの子育て支援施設を配置すると聞いているが、今回、小中一貫校2校になった場合、中学校区が減るので、子育て支援施設も減るのか。</p> | <p>一点目、スケジュールについて、今年2月にお示した案では、平成28年度(2016年度)中には計画を策定し、平成29年度(2017年度)から基本設計に入るスケジュールを予定していましたが、拙速に進めるべきではないと保護者や地域の方からご意見をいただき、また、さまざまな要素を勘案し、先に北校を整備し、その後、南校を整備したいと考えております。拙速に進めるべきではありませんが、庄内地域の諸課題については、小規模校化の課題に限らず、子どもたちの置かれている状況等も踏まえ、喫緊の課題であると認識しており、平成29年度(2017年度)中には計画を策定したいと考えています。</p> <p>二点目、放課後子どもクラブは、原則午後5時に下校し、それ以降、午後7時まででは延長保育となります。延長保育については保護者の迎いが基本となります。放課後子どもクラブの子どもたちの下校について、集団下校や子どもの安全見守り隊の活動等、こども未来部と教育委員会が連携を図りながら子どもたちの安全を確保してまいりたいと考えています。保護者によるお迎えについては、通学距離やその校区の地域の実情に合わせながら、また保護者のご意見をいただきながら、検討してまいりたいと考えています。</p> <p>三点目、公立こども園について、各中学校区に1施設の配置という基準はありますが、地域性等も勘案した上で、適正に配置していきたいと考えております。</p> |
| <p>私は、子どもたちの夢と音楽によるまちづくりをめざすということで、野田校区地域自治検討会にボランティアで参加している者である。北校は平成34年(2022年)に開校することだが、少子高齢化が深刻化している状況を見ると、想定よりさらに児童生徒数が少なくなり、800~900人の学校規模になるのではないかと。このままでは、教育環境が整っている地域に移る人も増えるのではないかと思う。五年先の人口減少も見据えて、どのようなプランを持っているのか。</p> | <p>日本全体で少子高齢化が進んでおり、庄内地域におきましても、深刻な状況です。「魅力ある学校」づくり構想や(仮称)南部コラボセンター構想などを含めて、南部地域全体が活性化するまちづくりに取り組んでいかなければ、今後、ますます人口は減っていくものと思われます。今ある諸課題を解消することはもちろんですが、同時に、市内外の若い世代、子育て世代がこのまちに住みたいと思うような施策を進める必要があると考えており、今回の「魅力ある学校」づくり等を柱として進めていきたいと考えています。</p> <p>野田校区地域自治検討会について、地域団体の方が相互に活</p> |

| | |
|--|---|
| | <p>動を助け合い、地域コミュニティ全体を活性化するという、いわば「地域コミュニティの理想の姿」だと感じています。豊中市内には野田校区のような地域自治組織が 41 小学校区中 7 校区で形成されております。今後、全校区で地域自治組織が立ち上がり、活動していただけることをめざして取り組みを進めてまいりたいと考えております。今回、既存の学校が閉校になった場合でも、小学校区ごとの地域活動を妨げるようなことは避けたいと考えています。</p> |
| <p>今日の資料7ページに ESD(持続可能な開発のための教育)が取り上げられていないのはなぜか。</p> <p>発達段階に応じた指導区分を3区分に分けているが、あえて区分を設ける必要があるのか。</p> <p>資料に新しい学校のシミュレーション図があるが、このような鉄筋コンクリートのマンモス校では、子どもの豊かさが育つとは思えない。私は、今の庄内地域の小学校は適正規模だと思っている。</p> <p>小規模校では、コミュニケーションをとりやすく、地域との距離も近い。既存の学校を老朽化で建て替えしないといけないならば仕方がないが、木造の温かみのある学校にするべきである。</p> <p>防犯対策について、メール配信や見守りカメラなどのICTに頼るのではなく、地域のきずなや子どもの自主性を育てることで、不審者も近寄りがたくなると思う。他力依存みtainな防犯では防犯にならないのではないか。</p> | <p>資料 7 ページに記載しております庄内地域の子どもたちにつけたい 3 つの力は、日ごろの子どもたちの学習状況や生活状況をみたり、保護者や地域の方々の声を参考にしたりして、こんな力を付けていきたいことを示したものです。多様な教育活動といたしまして、現在でも地域の方などをゲストティーチャーとしてお招きし、地域に密着した授業などを行っております。新しい学校においても、地域の方にご協力をいただいたり、地域資源を活用したりするなど多様な教育活動を進めていきたいと考えております。</p> <p>発達段階に応じた指導区分は、子どもたち一人ひとりの育ちに応じて指導の重点化を図るもの、特に、子どもの学びや育ちの大切にしたいところを小中の教職員が共有しようとするものです。小中一貫教育により指導区分をもうけた場合においても、文部科学省が定めた学習指導要領に基づいた指導をすることになります。</p> <p>小規模校の方が良いというご意見についてですが、小規模校にも一人ひとりに、きめ細やかな指導が行いやすい等のメリットもあります。しかし、現状、庄内地域の小学校では、クラス替えが出来ないなど教育活動に制約が生じております。子どもたちがより多くの人と関わり、豊かな人間関係を築いていくためには、一定の学校規模を確保し、多様な教育活動を行うことが望ましいと考えています。</p> <p>学校の木質化、木造の温かみがある学校ということですが、お示ししておりますシミュレーション図は、あくまで施設一体型小中一貫校を検証するために作成したものであり、決まったものではありません。校舎については、今後、方向性が固まり計画が策定された後、保護者や地域の方々などの意見をお聞きしながら、検討を進めていきたいと考えております。</p> <p>想定される安全対策について、資料にメール配信サービスや見守りカメラなどを挙げておりますが、これはあくまで安全対策の一例をお示したものであり、ICT機器に頼るのではなく、ICT機器も活用しながら、安全確保に努めたいと考</p> |

| | |
|--|--|
| | <p>えております。現在でも庄内地域においては、保護者や地域の方々に、通学時に見守りとして立っていただくなど、さまざまなご協力をいただいております。このような地域の皆さんとの連携を含めた安全対策も引き続き、必要と考えております。</p> |
| <p>南校の新校舎ができるのは、平成 36 年度(2024 年度)以降の話になると思うが、工事中に庄内南小学校の子どもたちはどこに行くのか。中学校はどうなるのか。</p> <p>今、現在の各中学校の生徒数と、北校及び南校の児童生徒数の推計値を教えてください。</p> <p>拙速に決めてはいけないと言っていたが、スクールバスの導入について、拙速に却下したように感じた。今まで説明会で出た意見に対して、市が取り入れた、あるいは方向性を変えたということがあれば教えてください。</p> <p>想定される安全対策について、子どもの安全見守り隊は、保護者や地域の方が忙しい中、協力していると思う。協力を求めるだけ求めて、スクールバスの導入をすぐに却下するのはどうかと思う。</p> | <p>南校は、想定段階ですが、平成 36 年度(2024 年度)から新校舎に移る想定をしています。2 月の説明会の時点では、最速の場合、南北同時に平成 28 年度(2016 年度)中に計画を策定し、平成 29 年度(2017 年度)より基本設計に入る構想案をお示ししていましたが、これまでいただいたご意見を参考にし、より丁寧にこの構想案を進めることとし、平成 29 年度(2017 年度)中に計画を策定し、北校から順に整備することを検討しています。仮開校について、北校の場合、小学校は平成 32 年度(2020 年度)から庄内小学校、野田小学校、島田小学校の子どもたちが野田小学校の敷地に通うこととなります。中学校は第十中学校の敷地に通うこととなり、新 1 年生は庄内小学校、野田小学校、島田小学校を卒業した子どもたち、新 2 年生及び新 3 年生は第六中学校と第十中学校の在校生が集まることとなります。仮校舎で 2 年間過ごし、平成 34 年度に新しい学校へ移動することとなります。南校は 2 年遅れで平成 34 年度に庄内南小学校、庄内西小学校、千成小学校の子どもたちが庄内南小学校の敷地に集まり、中学校は第七中学校の敷地に通うこととなります。ただし、再編スケジュールや仮開校の候補地、方法等は、現在の想定をお示したものであり、決まったものではありません。</p> <p>平成 28 年(2016 年)の 5 月時点の各中学校の生徒数は、第六中学校は 312 人、第七中学校は 340 人、第十中学校は 233 人です。北校と南校の児童生徒の推計値は、平成 33 年度(2021 年度)で北校は 1,132 人、35 学級、南校は 1,086 人、33 学級です。学級数については、通常学級のみで、各学年は 3~4 学級の規模になることを見込んでいます。</p> <p>スクールバスについては、全国及び近隣市町村、市内の他の校区の通学状況なども踏まえ、歩けない距離ではないと判断しました。また、子どもたちの体づくりにつながることが期待されます。しかし、まだスクールバスを導入しないと決まったわけではなく、今後、各校区で個別に説明会を行い、いただいたご意見を参考にしながら、さらに検討を進めます。</p> <p>これまでの説明会で出た主なご意見は、資料 4 ページに 5 点ほどあげております。それから参考資料として配布しております「庄内地域における『魅力ある学校』づくり通信第一号」の 4 ページにも記載しております。本日は時間が限られてい</p> |

| | |
|--|---|
| | <p>ますので、お時間のある時に、お読みください。市ホームページにも各説明会の記録を記載しておりますので、合わせてご覧ください。</p> |
| <p>人口減少や少子化が進んでいるということだが、今回の構想案によって庄内地域のまちが活性化し、施設一体型小中一貫校2校で収容できないほど人口が増加した場合はどうするのか。</p> <p>クラブ活動について、民間団体など連携することは考えていないのか。</p> | <p>今の想定では、北校、南校とも各学年3～4学級の規模になることが見込まれていますので、普通教室4教室を固めて配置することを想定しています。また、少人数指導を行う教室を転用した場合、各学年5学級までは収容できると考えています。将来的に、庄内地域の人口が増え、子どもの数がさらに増えた場合を想定して、学校跡地の利活用を含めて検討していかねばならないと考えております。学校跡地の利活用につきましては、学校は地域団体の活動場所や避難所として使用されていることなども勘案しながら、慎重に検討してまいりたいと考えています。</p> <p>クラブ活動につきましては、子どもたちの数が増えることで、今より充実した活動ができるのではないかと考えております。民間団体などと連携した部活動については、ご意見として伺いましたので、今後の参考とさせていただきます。</p> |